



モダンハンドボール 2018年度（上半期）の総括



はじめに



審判委員会・指導委員会で作成した、2018年度審判員の目標である「コンタクトプレーを正しく見極める」（モダンハンドボール）について、審判委員会では、競技規則研究委員会を中心に、国内・国際の大会において、**審判員の立場**からどのような成果、課題があるのかを見出し、2018年度下半期及び2019年度以降につなげていくために上半期の総括を行った。

審判員の**成果**



- 個々の審判員が、スピーディーなゲーム展開を目指しており、安易に笛を吹き、試合を中断するという場面が減少した（ unnecessary 笛の減少）。
- 影響を丁寧に見極めてから、判定しようとする審判員が増えた。
- 警告なのか、直接の退場なのか、それ以上の罰則なのかを丁寧に見極めて、判定しようとする意識が高まってきた。

ピボットは引き倒されてはいるものの、
その違反に対する**影響はとても小さい**。
アドバンテージを見て、**ゴールイン**。



ゲームの流れを優先し、笛の数を減らすことに重きを置いている。必要であれば、ゲームを止めずにプレーヤーとコンタクトを取っている。



速攻中のDFのコンタクトによるシュートへの
影響はない。最後は、打ち切っている。
罰則、7mスローではない。



DFのピボットに対するコンタクトは、シュートへの**影響はない**。最後は、打ち切っている。
罰則、7mスローではない。



審判員の課題



- モダンハンドボールが展開される国際大会においても、その判断基準（許容範囲）はまだ統一されていないように感じる（国際審判員の意見から）。
- 国内において、モダンハンドボールの考え方がうまく浸透されておらず、一試合を通して、あるいは一大会を通して、基準が統一されていない。
- 基準が統一されていないため、チームやプレイヤーが戸惑う結果となっているのではないか。

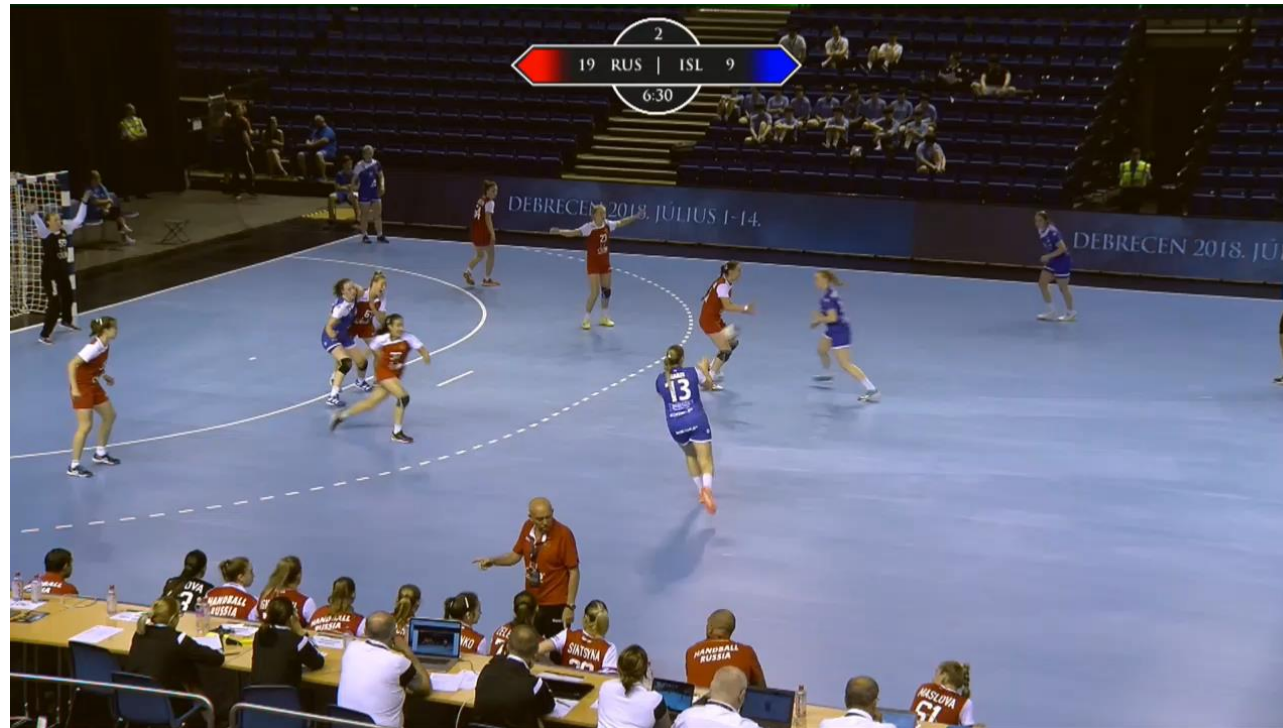
**DFは、ただOFに触れているだけで、押してもなければ、
抱え込んでもいいない。
フリースローの判定をしてはならない。
もちろん、罰則に該当するコンタクトではない。**



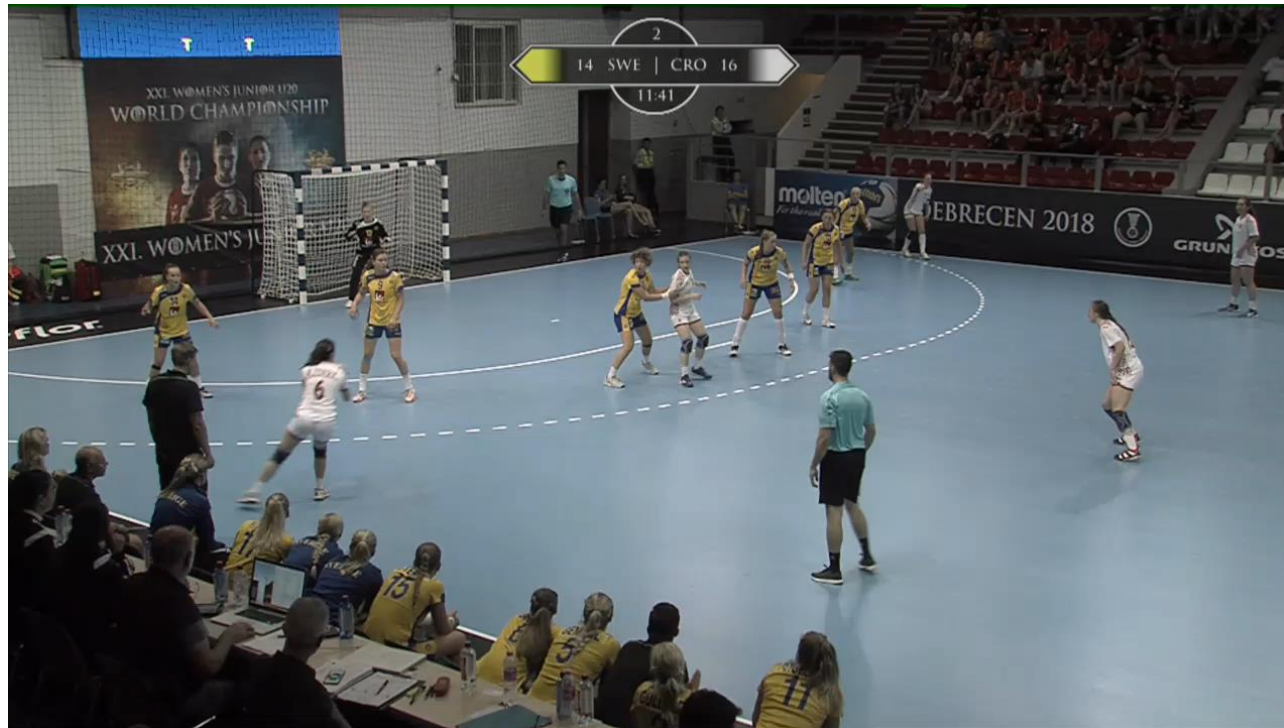
**DFのコンタクトは、シューターに影響はない。
罰則を適用してはならない。
軽微な違反に対してイエローカードを適用し、
クイックスローオフの機会を奪ってはならない。**



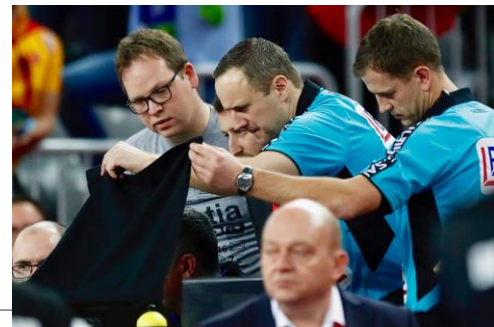
**なぜ、7mスローなのか。
シューターは、強いシュートを打つことができる。
7mスローでも、罰則のプレーでもない。**



**7mスローでも、2分間退場のプレーでもない。
ゴールキーパースローである。
レフェリーは、ハンドボールを十分に理解していない。**



審判員の課題



- ゲームの流れを重視するがあまり、最終局面で罰則を適用すべきラフプレーがあったにもかかわらず、「得点が決まったからOK」「シュートを打ったからOK」ということを理由に、ラフプレーが判定されない（結果、ラフプレーを許してしまっている）。

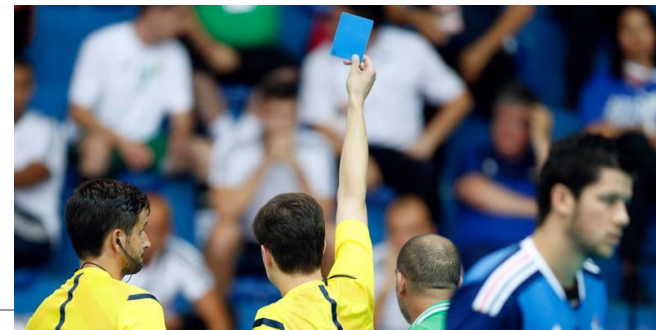
**空中のプレーヤーに対するこのようなプッシングには、必ず2分間退場の判定をしなければならない。
ゴールインしたからOKではない。**



空中のプレーヤーに対するこのようなプッシングには、必ず2分間退場の判定をしなければならない。ゴールインしたからOKではない。



審判員の課題



- 他の審判員から見てアドバイスをする際に、担当した審判員が影響を見極めて判定しているのか、そうでないか（笛を吹かなかったのか、吹けなかったのか、または罰則を適用しなかったのか、できなかったのか）の区別がつきにくい。
- 事実判定を正しく見極めることに精一杯である経験の浅い審判員（D級・C級）にとって、モダンハンドボールの考え方を浸透させるのは難しい。

プレイヤーの**成果**



- **国際大会**において、反則をされながらもシュートが決まれば、多くのプレイヤーはすぐに帰陣する。多少のアピールはあるものの、「ボディーコントロールは失っていない」と説明すると納得するため、モダンハンドボールの考え方が浸透しているように感じる。

コンタクトされつつも、影響を見極めて、試合を継続している。



プレーヤーの**成果**

- 国際大会において、試合中にレフェリーと、プレーヤーがコミュニケーションを取ることで、理解が広がっていると感じる。
- 国内大会において、身体接触を躊躇せず行うプレーヤーが増えた。



プレイヤーの課題



- ディフェンスが、罰則を取られたくないためか、早い段階で接触をやめてしまうことがある（ハードプレーとラフプレーの判断が審判員及びプレイヤーもはっきりしていないことが一因と考える）。
- 国内大会では、モダンハンドボールの考え方が十分に浸透しないためか、プレイヤーが罰則を判定してもらおうとアピールしてくる場合もある。

躊躇してDFが接触を止める



コーチの**成果**



- 国際大会では、プレーヤーと同様、影響を見極めていると伝えることで、抗議としてアピールするわけではなく、コミュニケーションの範囲で対応することができる機会が増えた。
- 国内大会においても、JHL、大学生のカテゴリーのトップチームスタッフは、コミュニケーションを取る中で、モダンハンドボールへの共通理解ができつつある。

コーチとのコミュニケーション



コーチの課題



- 都道府県大会や地区、市区町村大会レベルでは、モダンハンドボールの考え方が十分に浸透しておらず、影響がないプレーに対しても罰則を出してほしいとアピールする場合がある。
- モダンハンドボールの考え方が上手く浸透していないチームからのアピールをコントロールするためには、罰則をあえて適用することもあるかもしれない（世界基準ではなく、日本に理解される基準として）。

カテゴリーの**成果**

- 社会人、大学生のカテゴリーは、身体接触を試みたハードプレーの場面が増えてきており、スピーディーでダイナミックな試合内容となることが多かった。



カテゴリーの課題



- 全日本大会研修会でカテゴリーによっては、激しさの程度と影響が異なるため、シニアとユースでは罰則の適用も変わると伝えた。しかし、そういった考え方は、どれだけ浸透しているか不確かである。
- 身体の発達段階やレベルの相違、地域的な相違を考慮すると、中学生や高校生のカテゴリーまで、モダンハンドボールを一律に適用するのは難しいかもしれない。

カテゴリーの課題



- **アジア、世界で勝つためには、プレーヤーに対し、モダンハンドボールの考え方を浸透させ、その判定基準で国内においてもプレーを経験してもらうことが理想である。しかし、プレーヤーの身体的な発達段階を考慮した場合、モダンハンドボールの考え方を、全カテゴリーで適用するのは難しいのではないか。**

スピーディーなゲーム展開を求める課題

- 罰則の適用について、オールド・スタイル

（6枚のイエローカードを適用し、基準を示すという考え方）が、未だに残っていること。



後半に身体接触に伴うイエローカードは適用しないということを、知らない審判員もいる。またチームによっては、このことが全く伝わっていない場合もある。

- ピボットプレーヤーとディフェンスプレーヤーとの攻防について、審判員がコントロールできず、ラフプレーにつながる試合展開となる場合もある。

スピーディーなゲーム展開を求める課題

- GK なしでの攻撃（6 人 or 7 人）の際の
コートレフェリーの位置



世界大会で、ある審判員が交代のGKと接触する場面があった。この状況となった際、位置の交代を試みることなくコートレフェリーがベンチ側に位置を取っている場合が見受けられる。そのため、素早い選手交代を妨害する結果を招いている（結果的に妨害していなくても、しそうな場面が見受けられる）。

GK なしでの攻撃（6 人 or 7 人） の際のコートレフェリーの位置



スピーディーなゲーム展開を求める課題

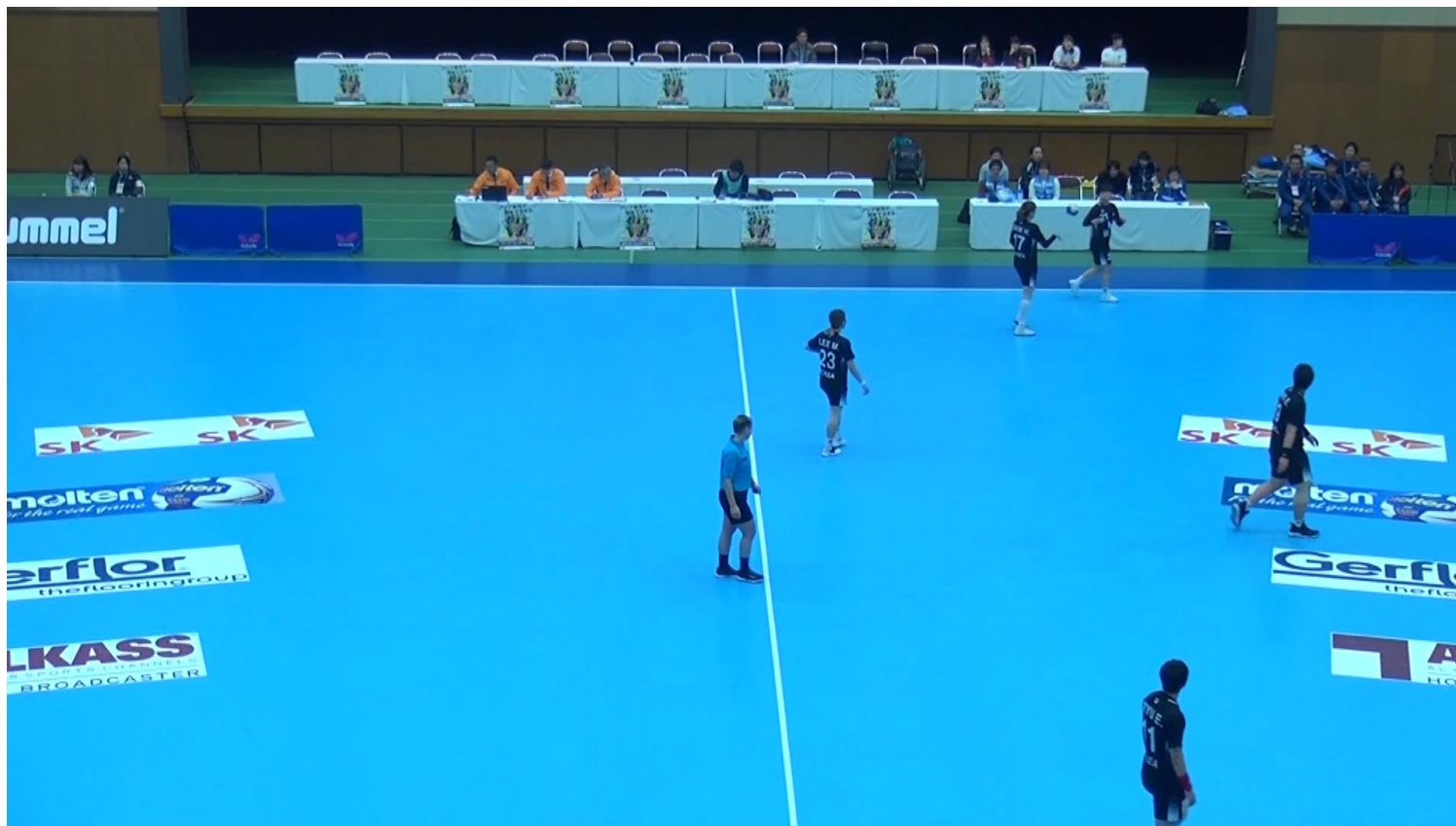
- 「怪我をしたプレーヤーが倒れていた
(怪我ではないが倒れていることも含む)
場合、速攻やクイックスローオフを中断させてはならない」という考え方が、チームに浸透していない
(例え審判が、得点チャンスが消滅するまでその攻撃を認めていたとしても、チーム側からタイムアウトを要求してくる)。
- ゴールエリア内の床が汗でぬれた場合、安易にモップを入れてしまう場面がある。ゴールエリア内は、反対側で攻防が行われている際にモップで拭くことを原則とする。また、ボールの交換についても安易に受けてはならない。



怪我をしたプレイヤーへの対応 (ゲームの流れを止めない)



**ゴールエリア内の床をモップで拭くときは、
攻守が入れ替わり、反対のサイドに選手が移動してから行う。
（スピーディーなゲーム展開）**



ゴールエリアライン内は、危険と認めた場合のみ床を拭く。原則として、攻守が入れ替わり、反対のサイドに選手が移動してから行う。



ゴールエリアラインとフリースローラインの間等、特に危険と認める場合は、プレーを中断して床を拭く。



プレーヤーからの要求で安易にボールの交換をしない。 (スピーディーなゲーム展開)



今後に向けて 審判員の判定（判断）基準の統一のために

- 映像を用いて視覚的に理解を深めていく。
- 伝達手段としての講習会・研修会の在り方を検討する。YouTube等を活用し、浸透を図る。



今後に向けて コーチ・プレーヤーへの理解のために

- 連盟、ブロック、都道府県審判長によるチームスタッフやプレーヤーへの講習会（年度当初、大会代表者会議等）の実施。
- 試合中に審判員とコーチ・プレーヤーとのコミュニケーションによって伝えていく。

今後に向けて 適用範囲の検討



- カテゴリーによる
モダンハンドボールの適用の検討。
- 審判員のライセンスレベルによる
モダンハンドボールの適用の検討。



今後に向けて スピーディーなゲーム展開の追求

- スピードハンドボールを表現するために
安易に試合を中断しない。

ーモップ、ボールチェンジ、
負傷したプレイヤーへの対応
など



今後に向けて 共通認識のために

- 強化、指導、審判との連携を密にして、日本の目指す方向性についての共通認識をさらに図る。



目指すモダンハンドボール

